

2017年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

数えきれない自然からの愛

(原文)

河上 結香 (14歳)

東京都

東京学芸大学附属国際中等教育学校

自然、それは私達にとって、かけ替えのない存在。何にも代えられない、大きなお母さんのような存在だ。そして、大きな家族でもあると思う。なぜなら、私たち人間は、自然のおかげでこの世界に誕生し、発展し、今を生きる事が出来ているからだ。自然が消滅してしまったら、どうなるのだろう。食べるものが無くなってしまおうのだろうか。人工と自然の境目がわからなくなってしまっていて、私には想像しがたい。

自然は、私達人間のことを、どの様に思っているのだろうか。はじめは、おとなしかった。しかし、技術が発展してくると、森林を伐採し、砂漠をつくり、動物を殺し、空気を汚した。それは、今も続いている。それだけではない、人間同士で争いまで始めてしまっている。あるものを分け与えずに、独り占めしようとして、今や、そんなことが当たり前になりつつある。だが、こんなことが何のためになるのだろうか、誰が幸せになれるのか。誰もいないだろう。もし私が自然だったら、とっくに怒って姿を消しているところだ。あなたたちを信じ、愛し、ここまで育てたのは自分なのに、と。しかし自然は存在し続け、今もなお私達に多大な恵みや、愛を与え続けてくれている。今、人間は地球にあまり感謝していないし、愛も持っていないと思う。だから私達は、自然を見習い、愛を込めて感謝しなくてはならない。

皆さんは、家族に感謝しているだろう。それと同じように、自分への地球からの愛へ、恵みへ感謝するべきだ。本当に感謝していることに対して、ひどいことなど出来るだろうか。

少し前、私はバングラデシュに掃除を伝える、というプロジェクトに加わることができた。これは、衛星への意識啓発のため、掃除を「SOUJI」としてバングラデシュの小学校に輸出する、という試みである。バングラデシュには掃除という概念がないため、そこら中にごみが落ちており、衛生的に危惧される状態だ。そこで私達は、日本の学校での掃除の様子などをビデオで撮影し、現地で上映した。私は、この動画がどれくらいの影響を与えるのか全く予想がつかなかった。しかし、動画上映の一年度には、ゴミで埋め尽くされていた学校の裏庭が、ほとんどごみの無い状態になっていた。言葉に表すことができないほど嬉しかった。

バングラデシュの人々にとって、ごみが多く落ちている状態は当たり前で、どれだけ悪影響があるのか知らないのだろう。それが、彼らの常識なのだ。そこで私は、「知る」ということは、当たり前の

ようでとても大切なことなのではないかと感じた。私達は今、自然が破壊されていることを知っている。知らなければ何もできないが、知っているからできることがたくさんある。考えることができる。また、自国で常識といえることも、海外ではそうではない、という考え方の多様性を知っている。だからこそ、自分の生活や考え方を見直す必要があると思う。

私が自然を守る必要があると思う理由は、それが全人類、全生物の未来を守ることにつながると思うからだ。今を優先するあまり、長く大きい未来を犠牲にしてしまうことは、とても勿体無い。温室効果ガスをたくさん排出し、地球を破壊することは容易にできる。しかし、それをもとに戻す方法を知っているだろうか。私は知らないし、多くの科学者たちも知らないだろう。そんなリスクを背負って何かに、トライすることはチャレンジではない。それは、未来を潰すことだ。全人類、全生物の未来を。

私は、この自然の問題は、人類全員に責任があると思う。人間としての責任だ。そこに気付き、想像し、考えるべきだ。そして信じて行動する。動かなければ何も変わらない。地球のように信じ、行動するのだ。

自然は、私達に愛し、信じることを教えてくれた。今度は、自然は、私達の今も、昔も、これからも命である。しっかりと命を守りたい。